

東京アートエキスポ から見えるもの

上原 誠 勇

去った三月の末、東京晴海の国際貿易センターで第一回東京アートエキスポ（国際美術見本市）が開かれた。会場は東館と西館を使うというビッグな国際見本市である。

戦前、戦後はもちろん、日本、いや東洋では初めての国際見本市である。案内状には、参加二十三ヶ国、世界の有名画廊百六十五社が出店する世界最大級の国際美術見本市、とコマージュルコピーが打たれている。

国際美術見本市と言えば、昨年十月パリで開かれたFIAACを思い浮べる。今日の作家達、新進気鋭の若い作家達のパワーあふれるコンテンポラリーの大展示会は感動モノだった。新しい時代の新しい価値感を持った作品、創造と芸術と言う言葉が疑いもなく前面に出された作品の数々の展示会である。

各ブースが個展に近いような展示方法をとって、画廊の推していると言う姿勢がよく理解できる空間である。これはいい作家だな、と思われる作家作品はほとんど売約の赤丸が付いている、美術界をとり巻く社会のバックグラウンドが出来上がっている事を物語っていた。何よりも会場を埋め尽くした、美術ファンやコレクターの出入が異様と思える程の熱気で包まれていたことがスゴイ!!

「世界最大級」と宣伝された東京アートエキスポ、羽田から直ぐ会場へと向かいたい気持ちをおさえて、まずはホテルへ荷物を預け、駅前の立食いでうどんを流し込んでから会場へ向かった。

晴海の会場へ着いてみると、意外なほど静かであるのに驚いた。今日は展示会の初日であり、当然人出と混雑が予想されるのだが、会場の中も外も人影がまばらである。

何か企画に不手ざわがあったのだろうか、あるいは一般への前宣伝が行き届かなかったのか、「一体これはどうなっているんだ」見に来た客の方が不安になる程の不人気である。

会場を訪れている客の数よりも、各ブースの関係者の方がヤケに目に付く。画廊のディーラ達の顔色がサエない。

二日後の日曜日の午後も足を運んで見たのだが、景気がよくない。交流のある東京の画廊にも何度か顔を見せたが、決して顔色がいいとは言えない。パリで知り合った画廊にも聞いて見たのだが、サッパリである。退屈そうにテーブルに肘肘をつきアクビしているドイツのディーラが印象に残った。

世界最大級、空前のスケールの宣伝とはウラハラに淋しい限りの第一回国際見本市である。

会場の一番座はN・Yの現代美術の大御所、レオ・キャステリ画廊が陣取り、その対局に、日本の大手画廊、フジ井画廊が絹谷幸二を持って来ている。

さて、展示内容の方はどうだろう。アブローチに日米の大物画廊を配し、「これは行けるな!!」と思いきや、会場内を一步、

二歩進んで行くと、「何だコリャ!!」の場違いか、期待はずれの世界があった。二流三流、決して今日的でない作品の二段掛け、三段掛けの、売らんかなの作品の展示風景である。

パリの見本市(FIAC)のような質レベルを保っている画廊はわずか、二〇社ぐらいで、後のほとんどは国際見本市どころではない有様だ。もうアートバザールと言った方がいくらいである。おそらく外国のディーラーも金満ニッポンのジャパンマネーと、日本の絵画レベルを意識した方策だろう。しかしひどすぎる。「日本へ持って行けば何でも売れる」の図式が今回の見本市に出てしまったのだろうか。

日本では印象派の絵しか売れず、現代美術は売れないという、日本の美術コレクターのレベルと足もとを見られたのか、それともナメられたのか、しかしそれはともかく、日本のディーラーが、自社(画廊)が推す国内作家をドーンと前面に出してない事が更に失望させる。何億、何十億の絵も購入できる日本のディーラーが、世界にも通用する作家を育ててない、育てようとしてない現実が見えてくるようだ。自家制(国内作家)の切札的作家がはたして日本から出るだろうか、今回の見本市を見た限りでは程遠いような気がした。

二〇年近い伝統がある欧米の見本市に対し、今日に至って、やっと第一回目を開くことが出来た日本の美術事情、この時間とレベルの差を見せつけられる思いだった。

十年来ビジネスで交流のある銀座の〇画廊主のF氏は、今日の日本の美術状況を次の様に言っている。

「居間の画商界の希望というのは、美術市場の活況とは裏腹にほとんど見えてこない。日本の国の中で、美術品と言われていたほとんどのものが芸術とはとても言えない代物だ。それらを作る人々を芸術家とはとても言えないからです。何故なら彼らの作品は個々において、日本国内では良質な部分を担っているかも知れないが、所詮アメリカの抽象主義やヨーロッパのアンホルメルの美術運動の影響を受けたものまねにほかないからです。」

芸術における新たな価値の創造という事に直面した場合、どうしても作家の思想、哲学、あるいは民族としてのアイデンティティが問題になる。日本の場合、その事を歴史の中に求めようとすると、ほとんど絶望的な気になる。いくら過去をさかのほってもオリジナリティが発見されないからだ」彼のストレートな口調には説得力がある。国内外の絵画を扱って十五年もキャリアがある彼だから言える事だろう。彼自身も多摩美の油絵科を出た絵描きクズレだから言う事もスルドイ!!彼はまだまだ言う。

「もう歴史とか、過去とか何も考えなくて、バーンと思い切り風穴を開けてもらいたい気がする(作家たちに)、アイデンティティはそれから作ればよい、今の日本は土台なのだ。僕たち画商も時代が感じられる作家を見つけたらドンドン世の中に発表していいじゃないか、価値に対する先見性を今こそ画商が発揮すべき時と思う」と強気で前向きである。旧態然として閉鎖的な画商が多い銀座でも彼の存在は大きく目立っている。日本の新世代の画商かもしれない。

彼の言うように、今の日本の美術状況は、画商も画商のレベ
ルだが、作家も作家だと思ふ。

昨年、パリで活躍しているウチナナンチュ彫刻家の幸地学氏

を訪ねた時、ヨーロッパでの芸術家の生活の有様や、画廊やデー
ラーの作家との関わりを知る機会があった。

日本、もちろん沖縄でも考えられないような、厳しい生活と
シビアな関係である事を知った。画廊のオーナーにも色々訪ね
て見たのだが、日本の画廊とは大違いであった。ある一人の作
家の芸術について、つまりその作家の作品の持つ力、美意識に
対し、作家はその裏に明確な思想と哲学がなければならぬ。
そして今日的であり、オリジナリテイな自立した作品でなければ
認められないのである。更に人間に対して前向きで力強く、
魅力的でなければ美術ファンはもち論、画商が付かないのであ
る。又画商もその作品の持つ力、美意識に共鳴し、全力を注い
で社会に出して行く事になる。作家も画商も常に全力投球しな
ければ成立しない世界である。

日本や沖縄の画家が、生活のために創作活動以外に収入のあ
る仕事をしてしまうのだが、欧米の芸術家の世界では論外なの
である。芸術家が自分の芸術を打ち立てるために、二十四時間
創作に時間を費いやしても、まだまだ足りないと言う作家生活
がある。とにかく本物はキビシイ。マネやゴッホ(マネやゴッ
ホではない)の時代は終わっている本物芸術家の時代が到来する
事を期待するのみである。

(うえはら せいゆう・「画廊沖縄」代表)

1991年.